

中山千夏さんから

中山千夏（なかやま ちなつ）
：作家、タレント、元参院議員
元声優（ジャリンコチエなど）



重信房子さんから

「パレスチナ国際連帯フェスティバル」の開催を、熱い思いで見守っています。

今年は、1948年12月の「国連決議194号」によって、パレスチナ人が「祖国へ帰還する権利」を保障されてから71年目にあたります。

しかしパレスチナでは、帰還どころか、「併合」と抹殺の危機にあります。

それでも、あの「国連決議194号」71年目に、パレスチナに連帯し、日本でグレートリターンマーチが列島に登場するなんて、何と痛快なことでしょう。

この祭は、パレスチナばかりか沖縄に、福島に、そしてカンナマ労組にも連帯しています。日本の各地で様々に闘っている人々が、出会い、連帯することによって、グレートリターンマーチから新しい関係が生まれるでしょう。期待しています。

特に大阪では、MCガザの燃える叫びを、「浪花の歌う巨人」と「炎の歌姫」がひとつになって、新しい連帯の扉を開くでしょう。

メイもその場を共に担うことを、私も嬉しく思います。

かつてリッタ闘争に旅立った戦士達が最後に残した言葉、「僕らの死を悲しむな。祭を！葬式ではなく祭こそふさわしい。」

この言葉を噛みしめながら、「パレスチナ国際連帯フェスティバル」を見つめています。

パレスチナ、沖縄、そして連帯カンナマ労組への不当弾圧に抗議し、また連帯しつつ、私も会場で共に在りたいと思います。

2019年 10月8日 重信房子

メイさんが生まれるずっと前から、メイさんのお母さんとはメル友、いえ手紙友だった。

『話の特集』という雑誌の企画で往復書簡やりました。

それからアラブを訪れてベガ-高原で初対面、終日、語り合い、その人柄が大好きになって、以来、心友。はるが昔、1980年代初頭のことでした。時々、お手紙をいただきます。

ある日の手紙にこうあった。

「メイと遊んでやってね」。わっ、お母さんだな、メイちゃんはもう立派なおトナ、私なんか遊び相手も務まらないよ、と笑ったものです。

母の願いです、メイさん、勉強も仕事もいいけれど、ちゃんと遊びもしてくださいね！

みなさん、メイをよろしく！

重信房子（しげのぶ ふさこ）

元日本赤軍（2000年解散）幹部。パレスチナ連帯と国際遊撃戦を闘う中でメイさんを出産。2000年、国内で逮捕されて投獄、懲役20年が確定し収監中。2020年に刑期満了

鵜飼哲さんから



鵜飼哲（うかい さとし）

京大大学院卒パリ第8大学留学。フランス現代思想研究の哲学者。一橋大学特任教授・名誉教授。反差別・リベラルの社会運動への関与や出版活動多し

『パレスチナと私たち』

パレスチナのことを考えながら「私たち」という言葉を発すると、その反響の大きさにいつも驚かされる。

パレスチナの解放を求める「私たち」は全世界に広がっている。

「ガザの沖で、パレスチナの沖で、殺されているのは人類だ。」トルコのガザ平和船「マルマラ号」がイスラエル軍に襲撃されたとき、フランスの連帯運動のなかから生まれたスローガンだ。

昨年春から続くガザ民衆の「帰還大行進」の闘いには、だから「人類」の希望がかかっている。

米大使館のエルサレム移転からシリア領ゴラン高原の併合承認へ、一体化する「白いアメリカ」トランプ政権とイスラエルこそは人類の敵だ。

トランプに縋りつき、イスラエルと急接近し、植民地主義克服の要請に背を向けて、みずからイスラエル化する日本も同断。

「私たち」は「彼ら」を包囲する。

世界のあらゆる場所で歴史の門をこじあけるために。

鵜飼哲。